研究ノート

パスパ文字が刻印された中央アジア・ホータンの貨幣

On a Silver Coin Struck at Khotan, Central Asia, in ’Phags-pa Script

安　木　新一郎
YASUKI Shinichiro

抄録
　ヒジュラ暦694年（1295年～1296年）に東トルキスタンのホータンで作られた銀貨にはパスパ文字mが刻印されている。従来、ロシア語圏の研究者はこのmはチベット文字で、チャガタイ家の諸王のタムガ（占有標）、あるいは「母」を意味する頭文字だと解釈してきた。しかしながら、ホータンを含むトルキスタンのオアシス地帯はモンゴル帝国直轄領であり、1269年に制定されたパスパ文字mはトルキスタン総督を世襲したヤラワチ一族を表したものと考えられる。

キーワード　モンゴル、トルキスタン、チベット、パスパ文字、貨幣

1．ホータンの銀貨

図1はウイグルのホータン地区で見つかった、パスパ文字が刻まれた銀貨である。直径21mm、量目2.0gのディルハム銀貨で、左側の面の中央にはラテン文字転写でm（マ）とあり、右側には中にアラビア文字でアル・オルド・アル・アッザームal-urdu al-‘azam、外側にホータンqtnの文字とヒジュラ暦694年（1295年～1296年）が見える。このmはチャガタイ家の諸王を表すタムガ[ZENO.RU:20536]、あるいは「母」を意味するチベット文字[Nyamaa2005:80]だと考えられてきた。

しかしながら、ホータンを含むトルキスタンのオアシス定住地はモンゴル帝国直轄領であり、帝国から任じられたダルガ（代官）が統治し、帝国直轄領の硬貨にはダルガの名前が刻まれることがあった。例えば、ブハラではブカ（不花）都帥の[安木2019]、カシガルではダルガであるアミール・マスウード・ベクの名が入っている硬貨[ZENO.RU:32141]が見つかっている。つまり、mは諸王の名でもタムガでもなく、ダルガの名だと考えられるのである。

2．貨幣発行権とパスパ文字

マスウード・ベクの父マフムード・ヤラワチはホラズム出身で、チンギスカンのホラズムシャー朝使節団員の一人であり、おそらく西遼（カラキタイ）の元宰相でもあった[バルトリド2011:217]。トルキスタン（ビシュバリク等処行尚書省）の総督（サーヒブ・ディーワーニー、財務長官）職はヤラワチ、マスウード・ベク、マスウード・ベクの長男サティルミシュ、次男セヴィンチ、名前不明の三男へと受け継がれた。mはマフムード、マスウード、あるいはヤラワチはマーマー（禡禡）・ヤラワチとも書かれたことからマーマーの頭文字のいずれかであろう。[1]

1　以前から中央アジアのソグド人が漢地にやって来ると、出身地を表す漢姓を名乗ることがあり[森部2013]、また契丹人を君主とする西遼（カラキタイ）はトルキスタンに中国風の習慣を持ち込んでおり、ムスリムであるヤラワチ一族にも漢風の姓のようなものとしてm（マ）があったのかもしれない。現在でも馬（マ）氏は回族に多く見られる。ただし、回族の姓としての馬はムハンマドの頭文字とされる。

このmの字形はチベット文字もパスパ文字も同じだが、1295年～1296年に作られた硬貨であるから、パスパ文字と書く方が妥当であろう。1269年に制定されたパスパ文字は元朝においてあらゆる言語を表すのに使われ、またジョチ朝[安木2015]やイルハン朝でもパスパ文字が刻印された硬貨が作られている。トルキスタンはモンゴル帝国直轄領であり、ダルガの名をパスパ文字で表記することに不自然さはない。

また、ホータンは帝国直轄領ではあるものの、つねに元朝の支配下にあったわけではない。

「(至元26年9月) 丁亥，罷斡端宣慰使元帥府。」(『元史』、巻15、世祖本紀12)

1290年9月にホータン宣慰使元帥府が廃止されており、元朝が統治できていない時期があり、1295年～1296年もカイドゥ王国の治下にあったと思われる。とはいえ、いわゆるタラス会盟で決められた通り、トルキスタンの帝国直轄領はヤラワチ一族が統治するという祖法自体は守られ、元朝で国字とされたパスパ文字も使われたのである。

図1　パスパ文字mが刻印されたホータンの銀貨[ZENO.RU:20536]

注）左面中央にmと刻まれている。

図2　パスパ文字chが刻印された銅貨（直径19mm、量目2.4g、製造地ティルミド、製造年不明）[ZENO.RU:1973]

注）左面に双葉状のchが見える。

3．帝国直轄領から諸王領へ

その後、1301年にカイドゥが敗死すると、西トルキスタンではチャガタイ家のドゥアが最高権力者になり、パスパ文字のch（チャ）の入った硬貨が作られた（図2）[Nyamaa2005:53-57][松井2008:21]。このchのタムガはチャガタイのタムガとはまったく異なり、また、ケベク、タルマシリン、ジャンクシ、ムハンマド、トゥグルク・テムルといったドゥア裔に若干形を変えながら継承されたが、カザンのようなドゥア裔ではない当主は少なくとも硬貨にchのタムガを使っておらず、chのタムガはドゥア裔固有のものだと言える。

このように硬貨に刻まれる文字がmやブカのようなダルガの名から、14世紀に入るとchなどに変化したのは、トルキスタンのオアシス地帯の主権が元朝から中央アジアの諸王に委譲されたからだと思われる。こうした貨幣発行権を含む本来皇帝が専有している権限の委譲が武宗カイシャン（クルク・カアン）期以降、ジョチ朝の領域でも見られるが、別稿にて詳述したい。

※本稿は、JPSP科研費16H01953（基盤（A）「前近代ユーラシア西部における貨幣と流通のシステムの構造と展開」、代表：鶴島博和・熊本大学教授）の研究成果の一部である。

（参考文献）

バルトリド、V.V.（小松久男監訳）[2011]『トルキスタン文化史1』、東洋文庫805、平凡社。

松井太[2008]「ドゥア時代のウイグル語免税特許状とその周辺」『弘前大学人文社会論叢』、人文科学編、19。

森部豊[2013]『安禄山：「安史の乱」を起こしたソグド人』、山川出版社。

安木新一郎[2015]「貨幣が語る中央ユーラシアの歴史：モンゴル帝国の貨幣」、佐島隆・佐藤史郎・岩崎真哉・村田隆志編『国際学入門：言語・文化・地域から考える』、法律文化社、17章。

安木新一郎[2019]「中央アジア・ブハラで作られた漢字の刻印されたディルハム銅貨」『京都経済短期大学論集』、26（3）。

Nyamaa, B.[2005]The Coins of Mongol Empire and Clan Tamgha of Khans(XIII-XIV), Ulaanbaatar, Mongolia.

ZENO.RU-Oriental Coins Database(https://www.zeno.ru/).